

The image features two anime-style characters with large, prominent breasts. The character at the top has pink hair and blue eyes, looking slightly to the right with a gentle smile. The character at the bottom has pink hair and purple eyes, looking directly at the viewer with a surprised expression. The background is a warm, golden-yellow color with a faint hexagonal grid pattern. The overall style is highly detailed and sensual.

# 理想ノカノジョ

Androids want to make love with you.

体験版



帰り道、コンビニに立ち寄る。

購読している雑誌の新刊が出ているのでそれをもってレジへ行く。

店員は愛想のよさそうな若い男だ。しかしその腕の関節部には、

人間にはない継ぎ目がある。好青年という言葉をもそのまま体現したかのような容姿。

接客業などの場で重宝されているタイプの男性型アンドロイドだ。



近年、アンドロイドは爆発的に普及した。  
人工知能と機械工学の発達はプログラムされたことしかできなかったロボットを、  
自身で判断し行動するアンドロイドへと成長させた。  
そしていまや感情を持った人間さながらのアンドロイドたちが、  
人々の生活を支えている。



人々はアンドロイドを家族や友人、同僚として扱うようになった。  
アンドロイドが人にとって代わる存在となるのではないかと危惧する人もいたが、  
今のところアンドロイドが人類に反旗を翻す様子はない。



自宅前に到着し、玄関のドアを開ける。

「おかえりなさいマスター」

いつものように一体の 안드로이드 が出迎えてくれる。  
夕飯と風呂を終え、買った雑誌を読みながら寝る前のひと時を過ごす。

「失礼しますマスター」

そしてまたいつものように彼女と体を重ねるのだった。



彼女は[サキ]。アンドロイドだ。  
俺が初めて買ったアンドロイドであり、恋人のような存在だ。

俺は二次元の女の子と結婚するのが夢だった。  
家庭用アンドロイドが発表されたとき、「コレだ！」と思い、  
アンドロイドについての勉強を始めた。

俺の夢を叶えるには市販のアンドロイドではダメだった。  
理想のアンドロイドをつくるために、俺はアンドロイド研究者となったのだ。



俺の理想とする女の子、それがサキだ。  
容姿から性格まで全てが完璧で、これ以上ないほどに溺愛している。

そして今そのサキとこうして身体を重ねている。  
これまで何度も身体を重ねてきたが、飽きることはない。



欲望のままに腰を突き出す。その度にサキの口からは嬌声が漏れ、その艶がしい声色に益々興奮する。

「あっ、あっ、んっ、はっっ」

息を乱し喘ぐ様はとても人間的で、アンドロイドとは思えない。もはやサキという1人の人間とセックスしているようだ。





ジワジワと下半身に込み上げるものがあった。射精が近い。  
抽挿のペースを上げる。

それに応えるようにサキは腰を深く落とし、  
精液を身体の奥で受け止めようとしていた。

「くぅ…っ、出すぞ」  
「は、はいっ、マスター…ッ」


腰を思い切り突き上げ膣内の最奥へとあたったのを感じたと同時にそれはやってきた。





サキの身体がびくんびくんと痙攣しているのがわかる。  
同時に達したようだ。

膣内のペニスは精液を吐き出し続け、行き場を失った精液が膣口から溢れている。



「はっ♡はっ♡はあ…♡」

息を整え陰茎を引き抜いた。  
2人の性器は互いの体液でドロドロだった。

「気持ちよかったですか…？マスター♡」  
「ああ…最高だったよ」  
「この前も、最高と仰ってました」  
「この前より最高だ」  
「ふふ…」

外からの光に照らされるサキの姿は美しくも淫靡でとても魅惑的だった。



# サキのダイアリーログ

[ SAKI's diary log ]



# サキのダイアリーログ

[ SAKI's diary log ]

No.001

日記というものを始めようと思います。  
といっても人間のようにノートに記すのではなく、  
テキストデータと画像データとして私の中に記していきます。  
これなら他人に見られる心配もありません。

あ、でもメンテナンスの際にマスターにだけは見られる可能性が…。  
念のためメモリーの奥の方に保存しておきます。



## サキのダイアリーログ

私の名前はサキ。アンドロイドです。  
マスターはアンドロイド研究者で主にハードウェアの研究をされています。  
私のボディも市販のものをベースにマスターが改良を加えているそうです。

私の仕事はマスターの身の回りのお世話です。  
料理や買い物、洗濯に掃除など、家でのマスターのお世話は全て任されています。

マスターの身の回りのお世話の中には夜伽も含まれます。  
私はマスターを強くお慕っていますからそのことに不満などありません。  
マスターと身体を重ねることはとても幸せで、代え難いものです。



# サキのダイアリーログ

[ SAKI's diary log ]

最初はこれくらいでしょうか。  
明日からはその日起きたことを思い出しながら、マスターとの  
生活の記録を残していこうと思います。

日記をつけることでより人間らしくなれますように…。





A pink-haired anime girl with blue eyes is shown from the chest up, standing in a bathroom. She has a surprised expression with sweat drops above her head. The background features a tiled wall, a window, and a shelf with bottles. The scene is framed by a pink hexagonal border.

No.002

今日はマスターとお風呂に入りました。  
今日はとってもほとんど毎日一緒に入浴しているのですが、  
私がマスターのお背中を流した後に突然マスターから、  
私がオシッコをしているところを見たいと言われました。

「え、あの、マスター、おしっこですか…？」  
「たのむ…！」

頭を下げて頼まれてしまいました。  
マスターにそこまでされてしまっっては断れません。

「どんな風に...ですか？」

「そこにしゃがんで、出すところが見えるようにしてほしい」

「こ、こうですか...」

私は屈んで和式トイレで用を足すような姿勢になりました。  
脚を開いているので出すところもちゃんと見えます。

カ  
オ  
ン  
ン

ツキ

ツキ

ツキ



「ああ、いい感じだ」

「では…おしっこ、しますね…。お目汚しにならないといいのですが」

膀胱にあたる機関に力を入れ、排尿を促します。  
アンドロイドの尿は実際には尿ではなく、  
体内を洗浄するのに使用した液体です。  
色は黄色いので見た目は人間の尿と大差ありません。





ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

ピタ

そこそこの勢いで出てきた尿が床に溜まり、排水口へと流れていきます。

マスターの眼前でおしっこをしているのだと思うと、  
なんとも言えない気持ちになりました。

罪悪感や背徳感、排尿の快感やマスターの要望を  
叶えられた達成感などが入り混じっていたのだと思います。



# サキのダイアリーログ

[ SAKI's diary log ]

No.003

最近になって私の他にもう一人の 안드로이드が家に住まうことになりました。名前はアカネちゃんです。赤い髪をした小柄の 안드로이드で、マスターの研究のサポート役として制作したそうです。アカネちゃんは電算能力に優れていて、物凄く賢いのでプログラミングなどソフトウェアの面でマスターの研究を手助けしています。



# サキのダイアリーログ

[ SAKI's diary log ]

アカネちゃんは妹みたいでとても可愛らしいです。  
普段はツンツンしていてわがままも多いのですが、  
本当は素直で優しい所がとても愛くるしくてたまりません。





# アカネのパーソナルログ

[ AKANE's personal log ]







はー、  
はー、

体に着いた精液を拭き取り、少し休憩した後、  
いよいよ挿入のときがきた。

先ほど射精したというのにあいつのペニスは余裕で怒張っていた。

後ろを向いてと言うので、愛撫でもするのかと思いきや  
いきなり身体を持ち上げられ、脚を開いた状態にされてしまった。  
部屋の空気がわたしの秘部をなでる。

「ちょっ！なんて格好…！」

「意外と軽いな」

「っ……！」



重いと言われなくて良かったと感じる間もなく、  
今の体勢が明らかにわたしを辱めるための体勢だということに  
怒りを覚え、必死に抵抗した。

手は自由だが殴ったりすると拘束を解かれて床に落ちかねないため、  
あいつの腕をつねるぐらいしか出来なかった。

「覚えてなさいよ…」  
「いたいいたい」

ヘラヘラしながら受け流された。

気づけばあいつの肉棒がわたしの股に触れていた。

「ッ!、い、挿れるの!？」  
「当たり前だろう」

身体が少し持ち上げられ、膣口に龟头が触れる。

「んっ……」

先ほどのパイすりの時点でわたしの膣口は潤滑剤で溢れ、受け入れる準備は万端だ。

ペニスが膣内に沈み込んでいく。  
ぞわぞわとした感覚が全身を駆け巡り、息が激しくなる。

ペニスは根元まで収まったようで、膣内で棒状の熱いものを感じる。

「んっっ…!!」

挿入だけで軽く達してしまったのか、身体が震えた。

「動くぞ」  
「ふあ、ふあい…」

気の抜けた返事をしてしまい恥ずかしくなる。

抽挿が開始され、快感が襲いかかってきた。  
ペニスは全部入っているのだからこれ以上進むわけないのだが、  
突き上げられる度に段々と奥へ突き入れられているような感覚があった。

「っ…！、あ、ふあ…」

脚を広げられ、ただただされるがままのわたしにできる抵抗は  
声を我慢することだけだった。

耳元であいつの息遣いが聞こえる。  
背後にいるので今の顔を見られないのは幸いだったが、  
その分声は聞かれているのだろうと思い、必死に我慢した。

「あっ…！んっ！んんんんっ…！」

抽挿が始まってから最初の絶頂だった。  
全身に力が入ったかと思うと脱力し、ビクビクと痙攣する。  
下腹部は熱い。意識がぼんやりとしていた。

わたしはオーガズムに達したが、あいつのペニスは未だ健在だ。  
全身が弛緩しきったところを突き上げられ、思わず声がもれた。

「ひあっ！ ああああっ！」

しまったと思ったがもう遅く、  
突き上げの勢いはさらにも増して襲ってきた。

「あっ、あっ、あっ」

膣内がかき回され、敏感になったところを容赦なく刺激される。  
涙が溢れ、顔がぐずぐずになっているのを見られないよう下を向く。





「やっ、ひっ、んんんん——っ！」

何度も絶頂してしまった。あいつは一度射精したからと言えど、  
こんなにも絶頂回数に差があると、  
このまま気を失うのではないかと思ってしまった。



弛緩しきった身体は涙や声をとどめることができず、  
遂には失禁してしまった。

黄色い液体が流れ出ていることに気づき、  
股間に手を伸ばそうとするも届かない。

「見るなあ……！」

泣きじゃくりながら懇願した。  
もうすでに見られてるのだから何を言っても無意味だが  
言わずにはいられなかった。

排尿が収まった頃、ようやくあいつも限界がきたのか、挿入のペースが上がった。

「…いつ、イキそうなの…？」  
「ああ…そろそろ出そうだ…」

イチモツが膈内で破裂しそうなほどに膨張しているのが分かる。





ハハハ

ハハハ

ムムム

ハハハ

ハハハ

アハハ

ハハハ

ムムム

ハハハ

ハハハ

ムムム

ウハハハ

ハハハ

ハハハ

ムムム

アハハ

ムムム

ハハハ

ムムム

びくんっと肉棒が膣内で跳ねたかと思うと、  
熱く滾った精液が大量に注ぎ込まれた。

パイズリの時と同等かそれ以上の勢いで精液が吐き出され、  
膣内を埋め尽くしていった。

「んんんんっ！んっ、ふっ…！」  
「くっ、か…はっ…！」



膣からペニスが引き抜かれる。  
膣口からはおさまりきらなかった精液が溢れ出し、  
ペニスは愛液と精液でドロドロだった。



身体中液体塗れのわたしはベッドに降ろされ、横になった。  
床はさっきわたしが漏らした尿で汚れていたが、気にするような状態ではなかった。

研究室にある簡易シャワー室を使い、身体についたものを洗い流した。  
疲労感と幸福感が襲ってきて脱衣所で倒れそうになった。

A red-haired anime girl with purple eyes and a black swimsuit is standing in a hospital room. She has a surprised expression and is holding her hand to her face. The room contains medical equipment, a desk with a computer, and a window with blinds. There are framed pictures on the wall and a red hexagonal graphic in the top left corner.

3...  
3...

シャワー室を出て、あいつと交代する。

シャワーを浴びている間にあいつはへやを掃除していたようで、  
飛び散った精液や尿で汚れた床は綺麗になっていた。

換気のために開け放った窓のそばで所在なさげにあいつがシャワー室から出てくるのを待っていた。  
時刻はすっかり23時を回っており、帰ったらサキにどやされるだろうといたことを考えていた。





サキが以前、風呂で放尿したことを思い出し、  
またやってくれないかと頼んでみた。


「恥ずかしいですけどマスターがお望みなら…」



早速風呂に入る。  
遅れてサキ、となぜかアカネが入ってきた。  
2人とも一糸まとわぬ裸だ。

「今日は私たちがマスターにご奉仕します」  
「お、おう」

意外な展開に戸惑いつつ応える。

An anime-style illustration of two young women in a bathroom. The woman on the left has pink hair and blue eyes, looking surprised. The woman on the right has red hair and purple eyes, looking angry with a lightning bolt symbol above her head. They are both nude. The background shows a tiled wall, a window, and a shelf with bottles.

「早く済ませましょ、ほら座って」

アカネが椅子を指差す

「アカネちゃんはこちらへ、マスターはそのままで構いませんよ」

「え？」

「私たちがオシッコするところをマスターに見てもらいます」

「はあ?!」

アカネがひとときわ大きい声を上げた。



アカネはサキにから説明を受けると、顔を真っ赤にして「変態！」と罵ってきた。

アカネが浴室から出て行こうとするとサキに止められる。サキがなんとかアカネを説得したようだ。

An anime-style illustration featuring two young girls with pink hair and blue eyes, wearing blue swimsuits with white accents. They are embracing a large, nude, muscular figure from behind. The scene is set against a dark background with sparkling light effects. The girls have surprised or blushing expressions. There are several small, stylized pink text elements scattered throughout the image, including 'Hi!' and 'Hi~'.

「マスター…よく見ててくださいね」  
「あたし、なんで…こんなこと…」

目の前にサキとアカネが一条纏わぬ姿で立っている。

2人の美少女が裸で密着している光景は、  
それだけで逸物がはち切れそうになった。



3人の間に沈黙が続く。

サキは目を瞑り排尿することに集中している。  
アカネは涙目でただただ恥ずかしさに耐えている。  
俺ははちきれそうな逸物がバレないように体勢を  
変えて二人の動向を観察している。

サキがぴくっと身体を震わせ口を開いた。

「私、もう出ちゃいそうです…。アカネちゃんはどうですか？」

「えっ、はやっ、あたしまだ心の準備が…！」

「緊張してるんですか…？じゃあこうするといいですよ」

サキの手がアカネの腹部や、尿道周辺を刺激する。

「あっ、ちょっ、サキ！」

「ひっ…んっ」

アカネから小さな艶っぽい声が漏れた。

「恥ずかしくないですよ…私たちがするところ、  
マスターに見て喜んでもらいましょう？」

ゴッ

アカネは顔を赤らめ目を細めるが、まだわずかに羞恥心が残っているらしく、俺をチラチラと見てくる。

「私が先に出しちゃいます。そうすれば恥ずかしくありませんよ…？」  
「っ…」

言い終わるとサキはすぐに放尿し始めた。

半透明の黄金色の水がサキの股間から滴り、徐々に勢いを増して流れてくる。ぱちゃちゃっと水音を立てながら流れ落ちる聖水は俺の目を釘付けにした。



「はああああ…♡」

サキは荒く息を吐きながら俺を見て悦んでいる。  
アカネはそんなサキの表情に少し引いているようだ。

「くぅ…っ！」

しかしサキの放尿につられて催したのか、  
アカネが身体を震わせた。

「アカネちゃん…一緒にしましょう？」

「う、うん…」

サキの一声で枷が外れたのか、尿意が我慢できなくなったのか  
分からないが、アカネも放尿し始める。

ぷしっとな音を立ててサキよりも一際強い勢いの放尿が始まる。

「くっ！み、見るなあッ！！」

自分の尿の勢いに驚いたのか、アカネは理性を取り戻し、顔を耳まで真っ赤にして訴えてくる。

しかし、一度流れ始めた尿は止められず、垂れ流しのままだ。

「~~~~っ！！」

半泣きになりながら尿がおさまるのを待つアカネ。  
しかしながらサキの方が早く放尿を終えてしまった。

俺とサキに見られながら放尿することになったアカネは  
ますます顔を赤くし、頬を涙が伝う。

「なんでえっ、とまらないのお…っ」

ここまでくると少し可哀想になってくる。

サキが頭を撫でたりしてやっているが泣き止むことはない。  
アカネの嗚咽と放尿音が浴室に響く。

ようやくアカネの尿がとまり、2人は身体を洗い始めた。  
アカネが放尿していた時間はサキの倍近くあったと思う。



# 理想ノカノジヨ

Androids want to make love with you.

## 体験版

制作：ちくわドロップ

イラスト：どす

テキスト：どす

-2018年11月上旬 発売予定-